

宍粟郡一宮町の巨樹と社叢

<町指定天然記念物調査報告>

建部恵潤 杉田隆三 橋本光政 甘中照雄

1 ま え が き

一宮町は揖保川上流の中国山地に位置し、面積213.64 m^2 の75%が山林で、町境は多くの1,000 m 級の山で囲まれている。したがって、大小の谷が多く、大きな谷には奥地にも隔絶した集落があり、そこには鎮守の森がある。

また、町域北部には幕領御林を引継いだいくつかの国有林がある。江戸期からの木炭生産林で、戦前には原生林的植生も多く見られた。戦後スギを主とした植林が進み、自然植生はほとんど姿を消した。

共有林、私有林にあっても、アカマツ林や木炭生産の2次林が主体であったが、戦後植林が進み、特に林業構造改善事業の実施によって、近年急速にスギ、ヒノキの植林地が増加した。

このようにして中部以南ではアカマツ林や2次林が多いが、中部以北では自然植生は少なくなり、造林地がひろがっている。

今回一宮町文化財の保護に関する条例の施行に当って、天然記念物（植物）指定のための調査の依頼を受けたので、上述の現況から社叢を中心に調査を行った。

調査結果は別に答申したが、ここに直ちに指定対象とはならないけれど、将来が期待されるものも含め、保護保存が必要な巨樹、社叢について報告する。

2 指定対象の巨樹

1. ^{ふかたに}深河谷池王神社のアカガシ（図1）

本樹については、文献(2)に報告したが、改めて測定調査した。

樹高、約20 m 。根回り、8.85 m （地上40 cm ）。幹回り、5.45 m （地上1.50 m ）。枝張り、東へ14.40 m 、西へ10 m 、南へ14.70 m 、北へ17.50 m 。

樹冠は傘状に広くひろがる。樹幹は縦に顕著な凹凸を生じて老巨樹の風格を具え、空洞になっているが、樹勢はなお盛んである。県下のアカガシ林にも、これほどの巨木はなく、学術的に貴重である。無条件に天然記念物に推奨できる。（社叢の項参照）

2. ^{あづみ}安積のカヤ（図2）

揖保川に架る安積橋の北詰に、国道29号線に沿って故小畑虎之助氏（衆議院議員）の顕彰碑があり、敷地の東隅に本樹がある。



図1 池王神社のアカガシ

樹高、約23 m （主幹欠損）。根回り、7.50 m （地面）。幹回り、5.50 m （地上1.50 m ）。枝張り、東へ8 m 、西へ4 m 、南へ4.30 m 、北へ5.80 m （枝の切断がある）。

雄株。幹周にくらべて樹高が低く、幹が空洞化している。樹勢がやや衰え気味であるが、新枝が盛んに発生し、急速に衰弱、枯死するとは思われない。

町域の社叢にはカヤが多い。（社叢の項参照）われわれが見た約60株の中で本樹は特に傑出しているだけでなく、県下有数の貴重なカヤの巨木である。

3. ^{せんちよう}千町のミズナラ（図3）

^{くさき}草木と千町の間道路の分岐点がある。標高約600 m 地点で、分岐点の目印に残したか樹霊信仰によるのであろうか路傍にミズナラの巨木が異彩を放っている。



図2 安積のカヤ



図3 千町のみズナラ

樹高、約18m。根回り、6.35m(地上20cm)。幹回り、4.20m(地上1.50m)。枝張り、東へ10.50m、西へ6.40m、南へ8.63m、北へ7.25m。

主幹はやや東へ斜上し、地上4m以上に枝が四方へ傘状にひろがり道路を被っている。主幹は空洞になっているが、樹勢はなお旺盛である。

ミズナラは冷温帯(ブナ帯)下部の要素として中国山地に普通で、千町周辺に多かったと思われる。目の前の草木川に架る大河内橋のほとりに、やはりブナ帯下部要素のイヌブナがあるのはこの類推がまちがいないことを物語るものであろう。県下に例のない貴重なミズナラの老巨樹である。

4. 上野庭田神社のケヤキ(図4)

樹高、約30m。根回り、7.85m(地上10cm)。幹回り、5.35m(地上1.50m)。枝張り、東へ20.30m、東へ20.30m、西へ16.40m、南へ15.60m、北へ14.60m。

庭田神社は延喜式内社。社叢はスギの大木が多く、自然植生は周辺部にわずかに残り、ケヤキ、カヤ、アラカシ、ヤブツバキ、シロダモ、ヤブニッケイ、エノキ、ミズキなどが見られる。

本樹は南端に残った自然植生の中にある。高さ約8mで分枝を始め、主幹も枝状になって標準的なケヤキの樹



図4 庭田神社のケヤキ

形でないのが惜しい。損傷がなく、樹勢は極めて盛んである。

樹林の中であって目立たないが、幹周は県の天然記念物“小枝神社の大ゲヤキ”（豊岡市）に匹敵する貴重なケヤキの巨木である。

5. 生栖いぎすのキヅタ（図5）

本樹については、文献(1)で報告したが再調査した。

キヅタが登りついているクロマツは、大歳神社の参道の両側にあった並木の1本で、他は伐りこの1本だけ残したが、枝はかなり伐った。もとは根元がくっついた2株でV字状にあったが、1本は枯れたと父から聞いている（隣家松本善吉氏62才談）ということである。

目通り3.12mのクロマツは斜上し、表側が地上1.30mまで腐朽し、その根元に生えたキヅタは、下部はクロマツの腐朽部と識別しにくい。しかし、地上20cm付近で2幹に分れ、太い幹が明瞭になり、地上50cm付近では半周が現れ30cmあるので、幹回りはほぼ60cmである。樹勢は衰えを見せず、異彩を放ち、景観的にも優れている。

キヅタは普通に見る植物で、幹周10~20cmのものはしばしば見るが、このように巨大に生長したものは恐らく最大級のものであろう。松本氏によると、クロマツ保護のためにキヅタを伐れという意見があるという。天然記念物に指定し、貴重なキヅタの認識を深め保護を図る必要がある。

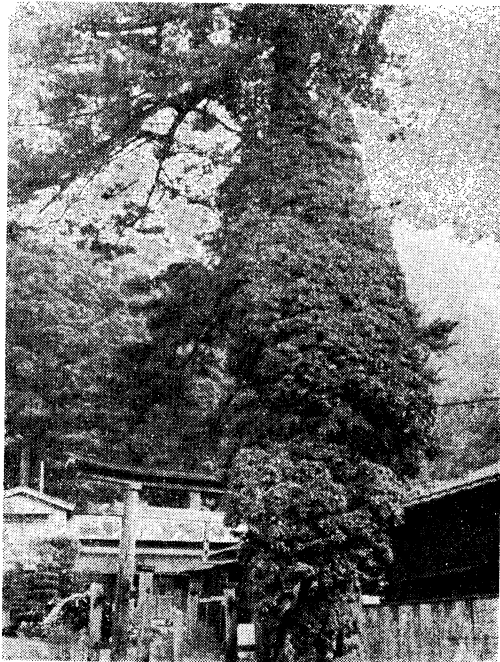


図5 生栖のキヅタ



図6 安積八幡神社のコナラ

6. 安積八幡神社のコナラ（図6・7）

安積八幡神社の社叢は重要で興味深い樹林であり、いくつかの巨木が存在していて、このコナラの巨木は特に貴重である。社殿背後の最もよく自然性の保存された樹林の中にあり、同定に苦しむほどであった。

樹高、約20m。根回り、5.45m（地上20cm）。幹回り、3.44m（地上1.50m）。枝張り、亜高木層のため測定不能。

コナラは2次林に普通で、宍粟郡ではホーソの方言で知られている。クヌギとともに良質の薪炭材で、しばしば伐採されるので大木は珍しい。このような巨木は県下でも報告がなく、最大級の巨樹であろう。しかも幹に腐朽がなく樹勢は盛んである。（社叢の項参照）

7. 公文くぶん（こうじや）若宮神社のスギ（図8）

若宮神社の境内南端にある。本殿の建つ一段高い境内を造る高さ2mの石垣の南端に接し、北側は境内造成のとき埋めたようで、東側との高低差は約2mで、本来は測定値より巨大であろう。

樹高、約38m。根回り、7.90m（地上20cm）。幹回り、6.08m（地上1.08m）。枝張り、東へ8.50m西へ5.20m南へ6.10m、北へ8.90m。根元、樹幹に傷や腐朽がなく、

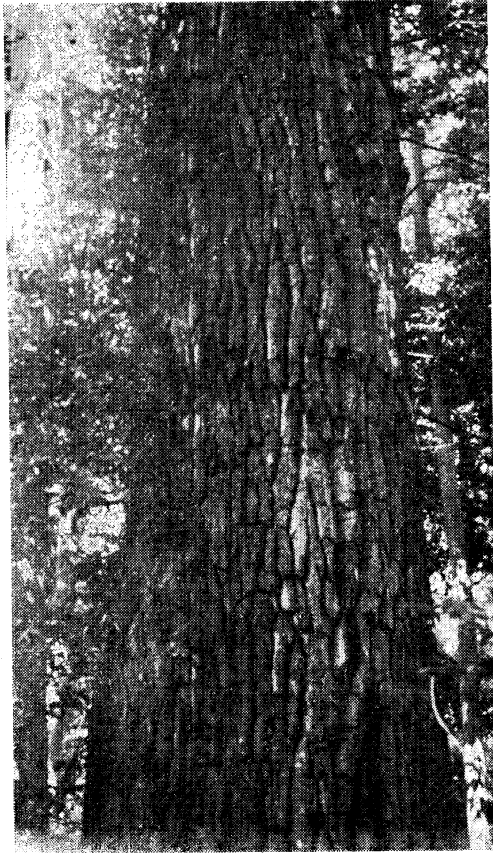


図7 安積八幡神社のコナラ(樹皮)

美しい木肌をしている。下枝には枯れたものがあるが、樹勢は旺盛であり、全樹が眺められるので、景観的にも優れている。町内で最も巨大なスギで、県指定天然記念物のスギにも本樹に及ばないものがある。

8. 安積八幡神社のスギ 2本(図9)

樹高, 2株ともに約40m。根回り, 北の株(A) 6.65m, 南の株(B) 5.60m(地上)。幹回りA 5.64m, B 4.50m。枝張り, 高さ2mの雑草で測定困難。

ともに高さ約20mまで枝がなく、美しい木肌をしている。全景が見えるので壮観である。下枝に枯れたものがあり、A樹の地上約10mに人為的と思われる損傷がある。

9m間隔で南北に並び、北のA樹は県天然記念物“水尾神社の大スギ”(安富町)に遜色のない幹回りである。

B樹も町内有数の優れた巨樹で、両者を併せて保存してきたことを考慮し、併せて指定するのが適切であろう。

A樹は道路の屈曲点に接しているので、樹幹の保護が特に必要である。(社叢の項参照)

9. 森添御形神社のスギ(夜の間杉)(図10)

御形神社は延喜式内社。広い社叢林は本来シラカシ林であったが、かなり古くヒノキ、スギを植えたので、シラカシは周辺に若干残るに過ぎず、現在の見事なスギ、ヒノキ林を形成した。スギは社殿周辺に多いが、特に顕著な巨木が“夜の間杉”である。すでに文献(2)に報告したが、再調査した。

樹高, 約40m。根回り, 7.25m(地上10cm)。幹回り, 5.38m(地上1.50m)。枝張り, 東へ8.70m, 西へ8.10m, 南へ8, 北へ7.77m。

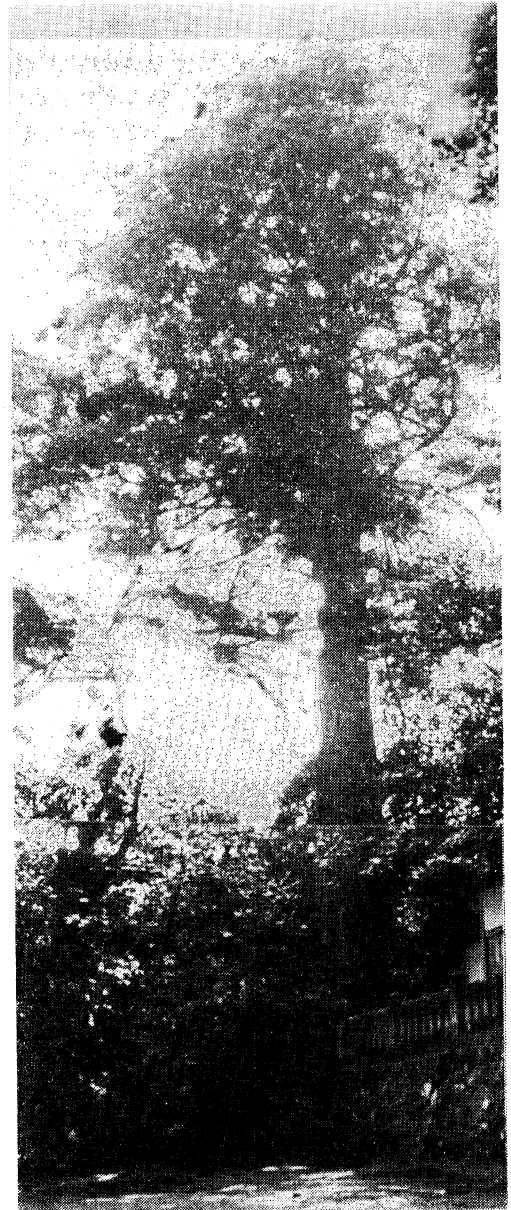


図8 若宮神社のスギ



図9 安積八幡神社のスギ



図10 御形神社夜の間スギ（中央）

本殿背後の社叢の中にあるので目立たないが、参道や神門下から樹冠部が見え、重要文化財の本殿の裏へまわると巨大な樹幹を見ることができる。

根元にも幹にも損傷がなく、樹勢は盛んで、将来さらに壮大になるものと予想される。優秀な巨樹であるばかりでなく、前報に書いたように、本社鎮座にまつわる社伝によって“夜の間杉”と呼ばれる伝説の木でもあるので、天然記念物にふさわしい名木といえる。

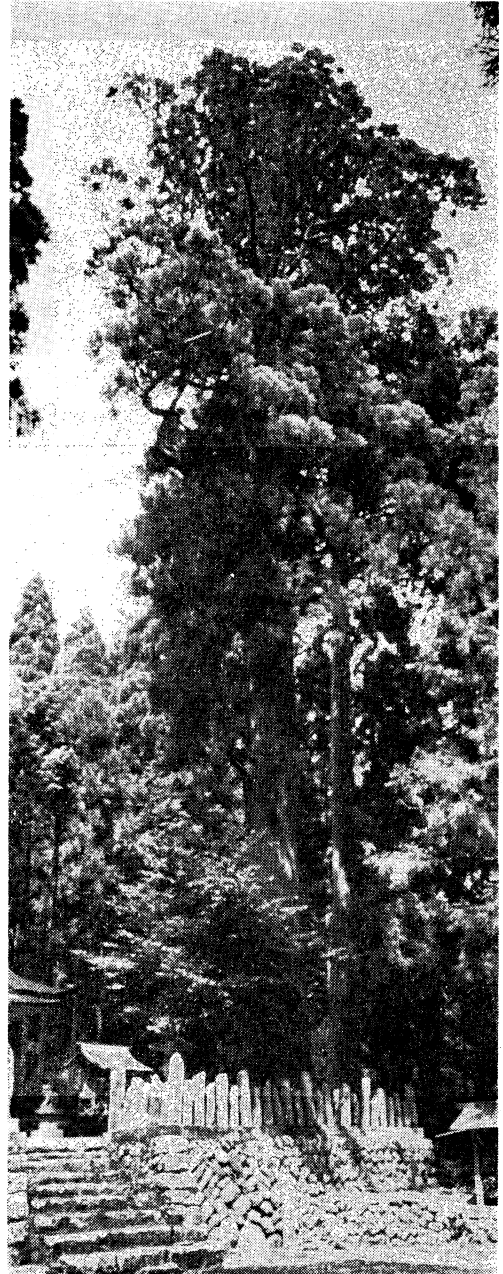


図11 千町若一神社のスギ

10. 千町若一神社のスギ (図11)

千町は揖保川の支流横住川の上流にある隔絶した集落で、若一神社はなだらかな山麓にある。標高660m地点である。境内周辺にはスギの大木があり、社叢はスギ林で自然植生は全く残っていない。

樹高、約35m。根回り、7.35m(地上)。幹回り、5.25m(地上1.50m)。枝張り、東へ5.50m、西へ6.20m、南へ9.20m、北へ6m。

社殿の向って前方にある本樹は特に壮大で、境内から全姿を眺められ、背後へまわると美しい木肌を見ることが出来る。損傷も枯枝もない優れた巨樹で、特に樹冠部の太い枝は巨樹の迫力を持ち、景観的にも傷れている。

11. 黒原若一神社のスギ (夫婦スギ) (図12)

揖保川の支流黒原川の上流に、黒原の集落が細長く続き、集落の尽きるところ東の山麓に若一神社がある。

夫婦スギ(双幹のスギ)には自然に双幹になったものと、接近して植えた2株が生長につれて密着したものとがあるようである。自然の双幹樹は植林地でも出現するが、間伐などで大木は稀である。神社では意識して2本植え双幹になったものを夫婦と呼ぶようである。

本樹は社叢の中にあって、ゆ着の痕跡はなく、自然にできた双幹樹と考えられる。単幹部は地上約4mで、主幹と支幹の太さの差が大きく、高さも差がある。

樹高、約35m。根回り、7.85m。幹回り、6.25m(地

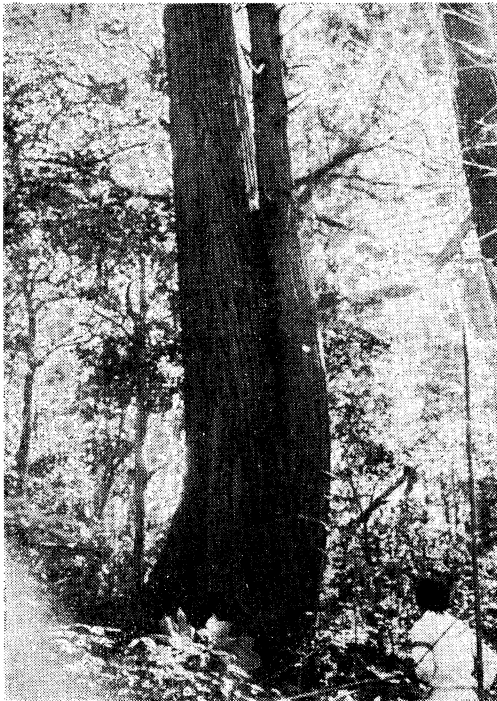


図12 黒原若一神社夫婦スギ

上1.50m)。枝張り、東へ9.40m、西へ9.40m、南へ4m、北へ10m。

町域で見たスギの双幹樹8株の中で、単幹部が最も太いものである。自然の双幹スギの典型的巨木として貴重である。

12. 庭田神社のスギ (夫婦スギ) (図13)

庭田神社には双幹のスギが2株ある。1株は南の参道を入ったところにあり、他は本殿の裏の北からの参道のかたわらの本樹である。

樹高、約35m。根回り、7.15m(地上50cm)。幹回り、5.62m(地上1.50m)。枝張り、東へ5.20m、西へ3.90m、南へ5.80m、北へ4.70m。

明らかに相接した2株が密着したもので、高さ約4mの単幹部は円形ではなく、だ円状で中央がくぼんでいる。2株がゆ着した双幹スギの典型として景観的にもすぐれている。正面入口の双幹スギは本樹に較べ幹周、樹姿など劣ったところがある。

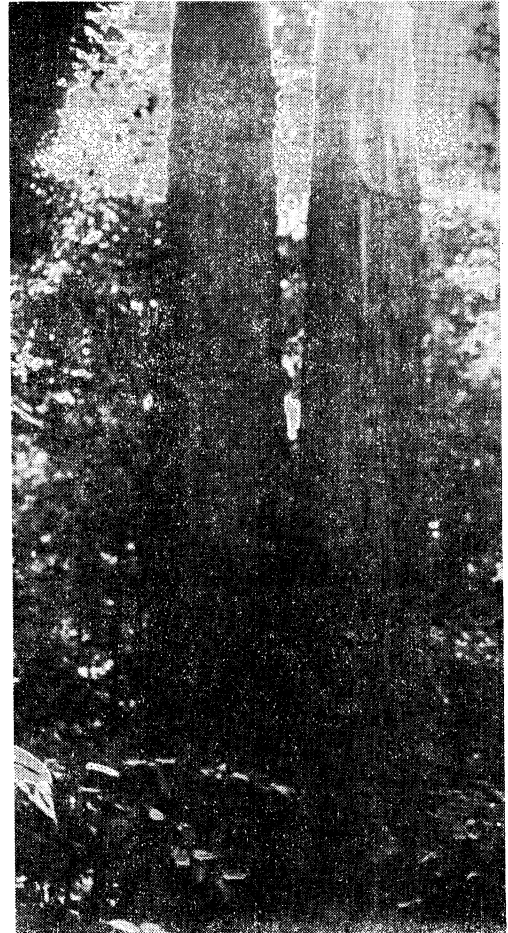


図13 庭田神社の夫婦スギ

3 指定対象の社叢

今回調査した社叢は26にのぼるが、自然植生が保存されている社叢は少なく、多くはスギ、ヒノキの造林地に変貌している。町域の山林の大部分が植林地になっている現状からみて、小規模であっても、保存度が低くても、自然性を保っている社叢は、町域の潜在植生を類推する基本的資料として貴重である。

つぎに挙げる社叢は、これらの中で自然度がよく残されているもので、天然記念物に指定し、これ以上自然植生が破壊されないよう保護する必要がある。さらに、地域の人びとが理解と協力によって、自然性の回復を図ることこそ文化財保護条例の主旨に添うものであろう。

1. ^{くもん}公文（西公文）川上神社のカーウラジロガシ林（図14, 15, 16）

川上神社は揖保川支流公文川とその支流^{おしこみ}押込川の合流点付近の平地にある。周囲にはこのようにこんもりと茂った常緑の森がなく、ひときわ目立つ社叢である。

高さ20~25mの高木層はウラジロガシ、カヤが優占し、それにホウノキ、ケヤキ、スギ、ヒノキが混じて、密集した樹冠を構成している。また、目通り1.05mのフジが巻き上がっている。

林内は暗く、亜高木層はヤブツバキ、シラキがある程度で、低木層もツリバナ、アオキ、アセビが点在するに過ぎない。

草本層は林内にシイタケ栽培がされていて自然性の少ないところもあるが、日射しのほとんど届かない林床に、ヤネフキササ、ヤブコウジ、テイカカズラ、ミヤマカタバミ、ツルアリドウシ、フユイチゴ、シライトソウ、キッコウハグマ、コチャルメルソウ、シュンラン、エビネ、ノギリラン、キツタ、ミヤマシキミなどがわずかにあり、また、クモキリソウ、イチヤクソウ、ミヤマウズラ、トキワイカリソウ、トウゲシバもほんのわずかながら見られた。

この社叢林の特徴の第1は、高木層にカヤが多いことである。目通り2.07mを最高に25本を数えることができた。カヤの純林は県下ではほとんど報告がなく、つぎの日野神社社叢とともに、西播では特異な存在である。カヤ、ウラジロガシ混交林として、冷温帯のブナ林と暖温帯上部との境界付近に存在した潜在植生と思われる。

第2に、一部のシイタケ栽培地を除けば、林床にわずかにせよ稀産種が残存していることは、この林相そのものがある程度自然性を高く保持してきたことを示している。

第3に、舞台の前に残されたヤマハゼはそれほどの大木ではないが、この太さ以上のものは県下では見たことのない貴重なものである。（図36参照）

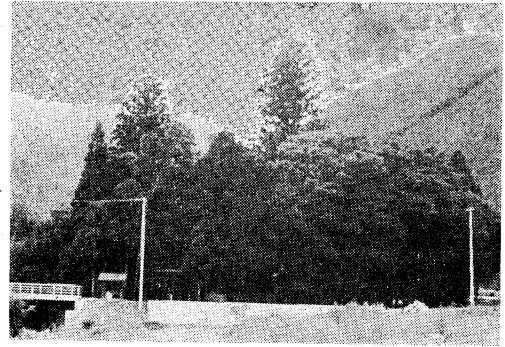


図14 川上神社社叢（全景）



図15 川上神社社叢（内部）

2. 上岸田日野神社のカーウラジロガシ林（図17, 18）

上岸田集落中心部背後の山麓台地の斜面にある社叢で、民家が接近し、社叢の上端はやや平坦で、外には畑や民家がある。景観的にも林内に入ってみても、自然度は決して高くない。しかし、その構成要素にはいくつかの貴重な植物が含まれている。

まず、構成の概要を記すと、高木層にはカヤ、ケヤキ、スギ、キハダ、カラスザンショウなどが25~30mの樹冠を占め、亜高木層にはヤブツバキ、ウラジロガシ、スギ、



図16 川上神社社叢（内部）

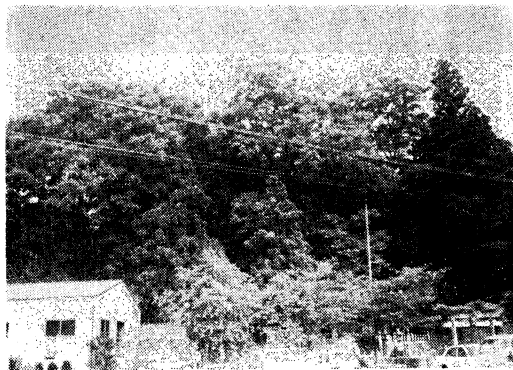


図17 日野神社社叢（全景）

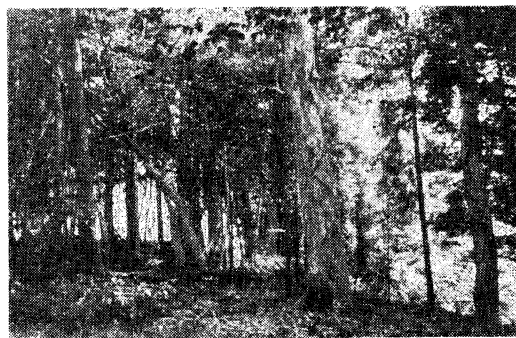


図18 日野神社社叢（内部）

シロダモ、カツラ、エノキなどがわずかに存在するに過ぎず、低木層もヒサカキ、サカキ、アオキ、タラヨウ、ナワシログミ、ツリバナなどで数は少ない。草本層も林縁に近いところでは多いが、中心部に近づくにつれ少なくなり、ヤブミョウガが群生しているところ、ネザサのひろがっているところ、テイカカズラが密生しているところが被度の高いところである。他はオウレン、ノブキ、ハグロソウ、シオデ、ヒメヤブラン、ハナイカダ、ニワトコ、ホウチャクソウ、ウコギ、シロダモ、ヒメユズリハ、カテンソウ、ヤブコウジ、サイハイラン、イヌワラビ、ジュウモンジシダ、ゲジゲジシダ、クマワラビ、コタニワタリ、ヤブソテツ、イノデなどが散生しているに過ぎない。

現植生は高木層をカヤが優占しているが、亜高木層に少ないながらもヤブツバキ、ウラジログシがあることから、潜在植生としては、カヤ、ウラジログシ林に相当すると思われる。標高350mで冷温帯（ブナ帯）と暖温帯上部との境界付近に位置した林相であろう。

この社叢林を特徴づけるのは、カヤの高木が多いことで、大きいものは目通り2.55、2.25、2.15mなどで、林内に18本を数えることができた。公文の川上神社の社叢とともに県下では珍しい貴重な社叢である。

さらに特筆すべきは、1株だけではあるが、目通り1.47m樹高30mのキハダの大木があることで、恐らく県下ではこれ以上の大木はないであろう（図37）その他、カラスザンショウ（目通り1.30m）、ケヤキ（目通り3.45m）、スギ（目通り2.90m）などがこの社叢林を特徴づけている。

また10数年前の台風で倒れたというカツラの大木の一部が残っているが、これによっても、この社叢林に潜在する植生の位置づけと、その豊かさは充分象徴されていると思われる。

3. 黒原若一神社のウラジログシ林（図19、20、21）

若一神社は標高約500mにあって、社叢は神社の周辺特に裏山にひろがっていて、ウラジログシ、スギ、トチノキ、ケヤキ、ヤブツバキなどが混在する樹林であり、特に神社裏にはかなり自然度が高い一面がある。このあたりを中心に林相を概観すると、高木層にはウラジログシ、スギ、トチノキ、ヤマザクラ、ヤマモミジがある。ウラジログシは4本だけあるが、各層にかなり多くの個体数が見られる。トチノキは数本あって、うち1本は目通り4.10mあり、オシヤグシデンダが着生している。スギは社殿付近にあるが、ウラジログシの高木近くには双幹の巨木がある。（巨樹の項参照）。また、マダケが侵入している。

亜高木層はスギ、ヤブツバキが優占し、ウラジログシ、

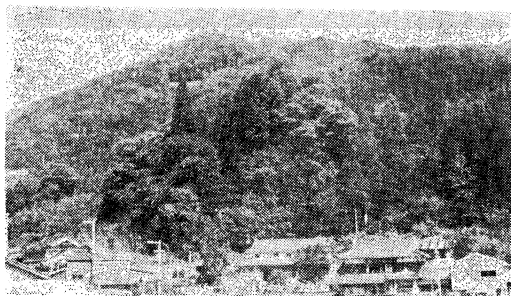


図19 黒原若一神社社叢

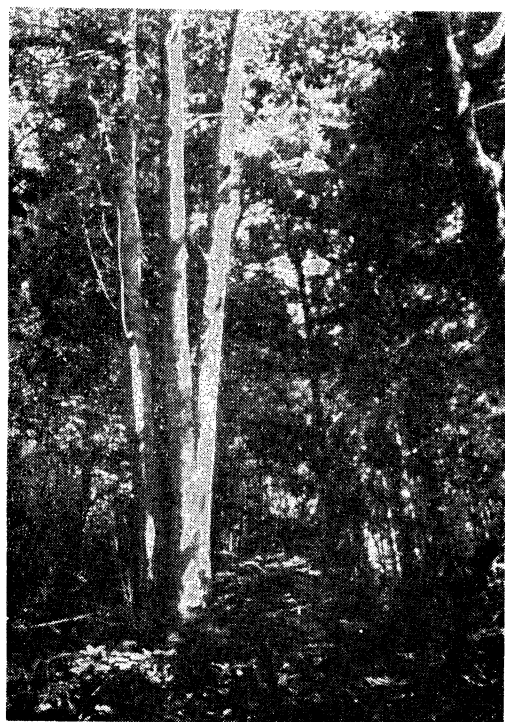


図20 黒原若一神社社叢(トチノキ)

アワバキもみられる。低木層は非常に種類が多く、まさに混在しているが、シロダモ、シラキ、アオキが優占し、ヤブツバキ、ヒメユズリハ、コシアブラ、ウラジログシなどがみられる。草本層はウラジログシ、アオキ、ミヤマシキミ、ツルリンドウ、ジュウモンジンダなど多くの種がみられる。

以上の構成から、この社叢はウラジログシ、トチノキが優占する樹林であったが、過去にスギを植林して植生が壊されたもので、現在は植生の回復途上にあるために、多くの種が存在するのであろうと考えられる。

つきに、組成の一例を示してみよう。

高木層 スギ(3)、ウラジログシ、トチノキ、ヤマザクラ(2)、イロハモミジ(1)



図21 黒原若一神社社叢(ヤブツバキ)

亜高木層 スギ、ヤブツバキ(2)、ウラジログシ、アワバキ、カツラ(1)

低木層 シロダモ、シラキ、アオキ(2)、ヤブツバキ、ヒメユズリハ、コシアブラ、ウラジログシ(1)、イヌガヤ、ミヤマハハツ、クロモジ、ハナイカダ、アブラチャン、ツノハシバミ、サンショウ(+)

草本層 ヤブコウジ、ウラジログシ、コシアブラ、アオキ、ミヤマシキミ、ヤブツバキ(1)、イヌガヤ、ノササゲ、シロダモ、テンナンショウ1種、ハエドクソウ、イヌツゲ、トチバニンジン、ツタウルシ、イワガラミ、フユツタ、ヤマモミジ、チゴユリ、ホウチャクソウ、フユイチゴ、チヂミササ、エビネ、ツルリンドウ(+)

前述のように、高木層のウラジログシは4本だけで、他の多くの種を含むが、亜高木、低木、草本各層にわたって、かなり多くのウラジログシの個体が含まれているから、これ以上手を加えなければ、将来立派なウラジログシ林に回復するであろう。

要するに、トチノキ、カツラは幼木、低木が見られないが、ウラジログシとこれらの混交林として、冷温帯と

暖温帯の境界付近に存在した潜在植生と考えられる貴重な社叢である。

4. 深河谷池王神社のアカガシ林

(図22, 23, 24, 25)

池王神社は標高約400 mの突出した山上にある。社叢はアカガシ林で、周辺部は2次林、植林地であるが、中心部はよく保存されている。

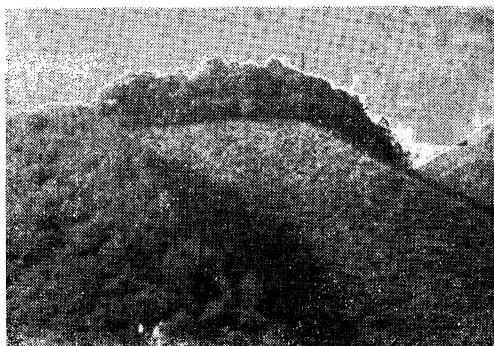


図22 池王神社社叢



図23 池王神社社叢（アカガシ）

高木層にはアカガシの大きな木を中心に、ウラジログシ、シラカシ、イヌブナ、アカシデ、モミ、ヒノキなどがある。亜高木層にはヤブツバキが多く、コシアブラ、ソヨ



図24 池王神社社叢（イヌブナ）



図25 池王神社社叢（ミヤマシキミ）

ゴ、アセビ、ホウノキ、スギなどが、低木層にはコシアブラ、ヤブツバキ、ウラジログシ、シキミ、シラカシ、サカキ、ヒサカキ、ヒイラギ、ヤブニッケイなどがある。草本層にはミヤマシキミが特異的に多く、ほかにヤブコウジ、テイカカズラ、シュンラン、ツルアリドウシ、キッコウハグマ、ミヤマウズラなどがある。

アカガシ林は県下では、特に瀬戸内海側の内陸部400～600 mの山地の山頂部（カシ帯の上限部）に特異的に出限するものであるが、この社叢はその代表的なものと思われる。

アカガシの巨木、イヌブナを含むあたりの組成を示すとつぎのようである。

高木層 アカガシ (4) イヌブナ, ウラジログシ (2), シラカシ, アカシデ, ヤブツバキ, ヒノキ, コハウチワカエデ (1)

亜高木層 ヤブツバキ (4), ヒノキ, ソヨゴ, ホウノキ, スギ, アセビ, ヤマモミジ (1)

低木層 コシアブラ (2), ヤブツバキ, シキミ, シラカシ, ヒノキ, ウラジログシ (1), ヤマウルシ, ヤブニッケイ, イヌツゲ, ヒサカキ, サカキ, アオキ, ヒイラギ (+)

草本層 ハイシキミ (4), ヤブコウジ, テイカカズラ (1), シュンラン, ツルアリドウシ, ヒメヤブラン, アキノギンリョウソウ, コシアブラ, ウラジログシ, スギ (+)

この社叢の特徴は、第1はアカガシ林の代表であるとともに、近隣に例を見ないアカガシの巨木が存在することである。(巨樹の項参照)第2は普通標高600m前後に出現するイヌブナが存在することであり、第3は比較的稀なアキノギンリョウソウが見られたことである。

以上で明らかのように、この社叢は町域の社叢の中で唯一のアカガシ林で、しかも冷温帯下部の標徴種イヌブナが存在するという特異な植生を持つ貴重な樹林で、特に保護保存が必要である。

5. 安積八幡神社のシラカシ林 (図26, 27, 28)

八幡神社は県立伊和高等学校北方の山足部にあり、境内を中心にかなり広面積にわたる社叢がある。景観的にはスギ林であるが、近よってみると、西半分はヒノキの植林地で、東半分は総体的にスギの老齢樹が多いが、周辺にはシラカシの高木が多い。

林内へ入ってみると、東側のスギ林の中にも点てんとシラカシの高木が残り、また社殿の裏側の斜面には立派な自然林が残っている。

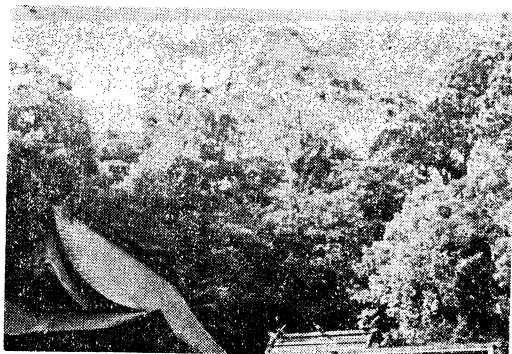


図26 安積八幡神社社叢



図27 安積八幡神社社叢 (社殿北側)

高木層には、シラカシが優占し、ほかに、スギ、コナラ、イヌシデ、ケヤキ、モミなどが見られ、亜高木層には、ヤブツバキ、サカキ、ヒノキ、ヤブニッケイ、タラヨウ、ソヨゴ、シラカシなどがある。

低木層には、ナンテン、アオキ、コシアブラ、シラカシ、ヤブニッケイ、モミ、ヤブムラサキ、クサギ、イヌツゲ、イヌシデ、サンショウなどがある。

草本層にはフユイチゴ、テイカカズラが優占し、ほかに、ミヤマシキミ、シャガ、ヤブコウジ、キチジョウソウ、チゴユリ、ピナンカズラ、イチヤクソウ、キッコウハグマ、カラタチバナ、マンリョウ、ベニシダ、シシガシラなど多種類のものが生育している。

シラカシ群集の区分種であるチャノキ、シュロは見られなかったが、シラカシの優占することと、区分種のナンテンの存在からシラカシ群集に属する森であることはまちがいない。

シラカシ林は県下の瀬戸内海側では、カシ帯の下部に成立するもので、宍粟郡、神崎郡などの山足部にある社叢はほとんどがシラカシ林である。

八幡神社の社叢は西播のシラカシ林でも規模が大きい方であり、ケヤキ、コナラ、イヌシデの大木もあるのでは是非保護したい。

つぎに組成の1例を示してみると、

高木層 シラカシ (4), スギ (1)



図28 安積八幡神社社叢（イヌシデ）

亜高木層 ヤブツバキ, サカキ, ヒノキ(2), ヤブニッケイ(1)

低木層 シラカシ, コシアブラ, アオキ(2), ヤブムラサキ, ヤブニッケイ, サンショウ, モミ(1) コンテリギ, ソヨゴ, イヌツゲ, イヌシデ, エゴノキ, ヒメユズリハ, ヒサカキ, クサギ(+)

草本層 フェイイチゴ, テイカカズラ(2), ミヤマシキミ, アオキ, ジャガ, ヤブコウジ, ピナンカズラ, チゴユリ, キチジョウソウ(1) サンショウ, サルトリイバラ, ホウチャクソウ, シンガシラ, ヒメヤブラン, ヤブタバコ, ヘクソカズラ, ヤマホトトギス, イチヤクソウ, ナキリスゲ, トウゲシバ, ツルアリドウシ(+)

6. 生栖大歳神社のシラカシ林 (図29, 30)

大歳神社は昭和50年9月山くずれのあった下三方小学校の少し南の山足にある。神社裏にせまる山を見あげると、シラカシを主として、トチノキ、ケヤキ、カヤなどの大木が神社を取り囲むようにそびえている。裏山の中腹にある狭い平地は畑になり、さらに上方はスギの植林地になっているが、山麓は高木層から草本層までそろった立派なシラカシ林になっている。

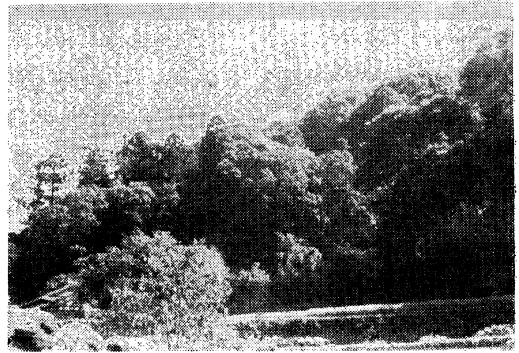


図29 大歳神社社叢



図30 大歳神社社叢（部分）

高木層はシラカシが優占し、樹高約25mに達しており、うち1本は目通り2.45mあった。ヒメノキシノブ、カヤラン、マメツタが着生している木もある。その他トチノキ、カヤ、ケヤキも混在している。

亜高木層はアラカシ、スギが優占し、アワブキ、ヤブツバキなどが混るが、かなり貧弱である。低木層はシラカシ、アオキ、エゴノキ、クロモジ、ヤブツバキなどがみられる。

草本層は貧弱であるが、シラカシ幼木をはじめフェイイチゴ、テイカカズラ、サカゲイノデ、クマワラビなどがみられる。

このシラカシが優占する区画の左手に、トチノキ、ケヤキが目だつ林が続いているが、低木、草本層にシラカシの個体が多く、シラカシ林に移行するものと考えられる。

なお、社叢中にコバノヒノキシダ、ゲジゲジシダ、リョウメンジダ、チャセンシダ、イヌシダ、ヤブミョウガ、コクサギ、ノブキ、ミヤマカタバミ、コンテリウツギ、ミズタマソウなど多くの種が見られた。

シラカシ優占区域の組成はつぎのようである。

高木層 シラカシ(4)、トチノキ(2)、ヒノキ、カヤ、ケヤキ(1)

亜高木層 シラカシ、ヒノキ(2)、ヤブツバキ、アワブキ、エンコウカエデ、ヤマウルシ(1)

低木層 シラカシ、アオキ、ヤブツバキ(2)、ヤツデ、ヒサカキ(1)、コバノガマズミ、エゴノキ、クロモジ、ウリカエデ、ヤマモミジ、サカキ(+)

草本層 フェイチゴ、テイカカズラ(2)、ベニシダ、ヤブコウジ(1)、シュンラン、ミゾシダ、ヒメヤブラン、シシガシラ、イチヤクソウ、イヌワラビ、キヨタキシダ、テンナンショウ1種、ホウチャクソウ(+)

7. 西安積八幡神社のシラカシ林(図31, 32, 33)

黒尾山(1,025)の東山麓にある緩やかな平地状の山足に八幡神社がある。参道の両側にはスギを主として、ツガ、シラカシ、アラカシ、アカシデの高木が並んでいる。この神社をとりまく広い面積にわたって、シラカシ林がひろがっている。外観はスギの大木の森に見えるが、入ってみると、意外に自然性がよく保たれた区画があり、スギの植林と小径によって分断されてはいるが、シラカシの高木が広い範囲に分布している。

高木層はシラカシが優占し、アカシデ、ケヤキがまじっている。亜高木層はシラカシ、カラスザンショウ、カヤ、ケケンボナシ、ヤブツバキなどがみられる。低木層にはシラカシ、コシアブラ、ゴンズイ、ナンテン、アブラチャン、ヒメユズリハ、サンショウなどがみられ、草本層はキッコウハグマ、シラカシ、エビネ、フェイチゴ、カラタチバナ、ツルリンドウ、ナンテン、チャノキなど構成種が非常に多い。

これだけ広い面積にわたって、多数のシラカシの高木が残っている社叢は数少ない。しかも神社の右手や裏側は、低木層、草本層ともにシラカシの個体数が多くて、めざましく過去の植生をとりもどしつつある。30年も放置すると、りっぱなシラカシ林に復元するだろう。

参道入口北側の比較的人の手が入っていない区画の組成はつぎのとおりである。



図31 西安積八幡神社社叢(東部)



図32 西安積八幡神社社叢(南部)

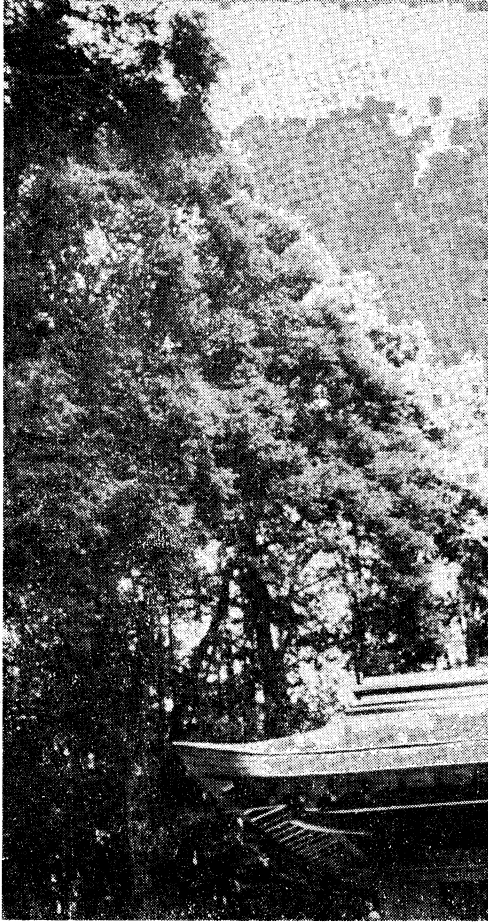


図33 西安積八幡神社社叢（社殿裏）

- 高木層 シラカシ（4）
 亜高木層 イロハモミジ（3），シラカシ（2）
 低木層 コシアブラ（3），スギ，ヤブツバキ，
 シラカシ，コバノガマズミ（2），アオキ，
 イロハモミジ，ウワミズザクラ，ヤマウルシ
 （1），クロモジ（+）
 草本層 シラカシ，テイカカズラ（2），サルトリ
 イバラ，ヤブゴウジ，フユイチゴ（1），ヤ
 マウルシ，カラタチバナ，スギ，ヒサカキ，
 イヌツゲ，イワガラミ，ソヨゴ，イボタノキ
 （+）

8. 伊和神社のシラカシ林（図34, 35）

播磨国一の宮伊和神社は国道29号線沿いの平坦地にあ
 って、5.3ヘクタールの広大な社域がスギの大木に被わ
 れた立派な社叢林を形成している。社叢全域にわたって、
 20年以下のスギの植林部分のほかは、シラカシの高木が
 みられる。

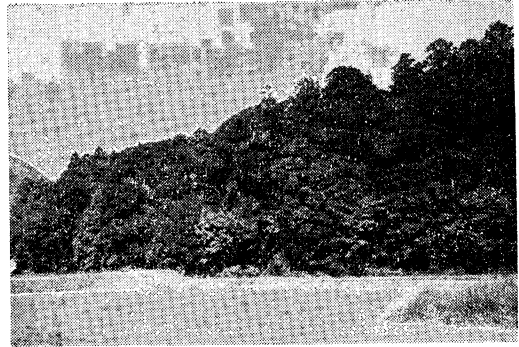


図34 伊和神社社叢（北端部）



図35 伊和神社社叢（南部）

特に自然性がよく保たれているのは、北の周辺部一帯
 で、アオキが優占する低木層をもち、シラカシの大木を
 交えた自然林に近い林が残っている。

そのようなところでは、高木層にはスギが優占し、シ
 ラカシの大木もかなりある。亜高木層にはシラカシの中
 木、ヒサカキ、サカキの大きなものがある。低木層には
 アオキが優占し、シラカシの幼木、サカキ、ヒサカキ、
 コシアブラ、チャノキ、ネズミモチ、シュロ、ヤブニッ
 ケイ、ヤマウルシ、マンリョウ、カラタチバナなどがあ
 る。草本層はテイカカズラが優占し、シラカシの芽生え、
 ベニシダ、フユイチゴ、ヒメヤブラン、シュンラン、

フユヅタ、ネザサ、コバノイシカグマ、ハシゴシダ、ミズヒキ、オオハナワラビなどが生育している。

社殿の南（裏側）一帯も、ほぼこれに近い植生をもった自然林に近い林で、少数であるが他にヤブツバキ（亜高木、低木）、ヤナギイノコヅチがあり、国道に沿った自然林にはアベマキ、クリ、シロダモ、ケケンボナンがみられた。

シラカシが出現し、わずかではあるがチャノキ、シュロ、マンリョウが存在するから、シラカシ群集に属する森であり、各属にシラカシが出現しているから、下草を刈らずに放置しておく、シラカシの極相林が出現することはまちがいない。

人家近くの平坦地に、このような大規模なシラカシ林が存在することは珍しく、貴重な社叢といわねばならない。

つぎに、北端部の組成の一部を示しておく。

高木層 スギ（5）、シラカシ（3）

亜高木層 サカキ（3）、ヒサカキ（1）

低木層 アオキ（4）、サカキ（3）、シラカシ、ヒサカキ（2）、コシアブラ、ヤマウルシ、チャノキ、ネズミモチ、ヤブニッケイ（1）、コバノガマズミ、ムラサキシキブ、ヒノキ、カラタチバナ、マンリョウ（+）

草本層 テイカカズラ（4）、ベニシダ、ヒメヤブラン（2）、アオキ（芽）、シラカシ（芽）、ハシゴシダ、コバノイシカグマ、フユイチゴ、フユヅタ、シュンラン（1）、ミズヒキ、シュロ、ノササゲ、ビナンカズラ、イワガネソウ、ナルコユリ、ヘクソカズラ（+）

4 留意すべき巨木と社寺林

つぎの巨木や社寺林は、直ちに指定対象にはならないが、いずれも将来に期待が持てるものである。特に社寺林は自然性の回復が待たれる。地域の人びと、関係者の理解と協力を重ねてお願いしたい。

- | | | | |
|----|-------------------------|------------------------|-------|
| 1 | 安積八幡神社のケヤキ | 4.50 | |
| 2 | 糀屋若宮神社のケヤキ | 4.30 | |
| 3 | 公文川上神社のヤマハゼ | | (図36) |
| 4 | 日野神社のキハダ | 1.47 | (図37) |
| 5 | 同 カラスザンショウ | 1.30 | |
| 6 | 西安積八幡神社のスギ | A4.75, B4.55,
C3.96 | (図38) |
| 7 | ^{おち} 百千日吉神社のスギ | 4.32 | |
| 8 | 庭田神社のスギ | 4.20 | |
| 9 | 御形神社のスギ | A4.75, B4.50,
C4.50 | |
| 10 | 草木神社のスギ | 3.95 | |

- | | | |
|----|---------------|------|
| 11 | 伊和神社の夫婦スギ | |
| 12 | 御形神社のヒノキ | 4.90 |
| 13 | 下野田虚空蔵堂のガゴノキ林 | |
| 14 | 御形神社社叢 | |
| 15 | 糀屋若宮神社社叢 | |
- (数字は目通り周囲, 単位m)

5 終りに

調査は7月から9月にわたって、ほぼ町の全域にわたって実施したので、一宮町における植物文化財はほとんど挙げる事ができたと思う。ただ、特殊な植物の群落、群生地で今後に残したものがあつた。

調査の成果を要約すると、

(1) カヤを主要素とする県下でも珍しい社叢の存在が判明したこと。

(2) 比較的少ないアカガシ林に1例が加えられたこと。

(3) ウラジロガシ林、シラカシ林、アカガシ林の分布が明らかになり、町域だけでなく揖保川上流域の潜在植生究研に功献できたこと。

(4) 県の天然記念物級の巨樹、県下に例のない樹種の巨木が判明したことである。

これらは、県下の植生研究、県の文化財行政にも大きく寄与できるであろう。町域の植物文化財の調査を積極的に推進された一宮町当局に対し、深甚の敬意を表してやみません。(昭和56・9・28)

文 献

1. 建部恵潤：兵庫県宍粟郡と近接地の植物文化財 (1), 兵庫生物 Vol. 6, No. 3 (1972)
2. —：同 (3), 同 Vol. 6, No. 5 (1974)

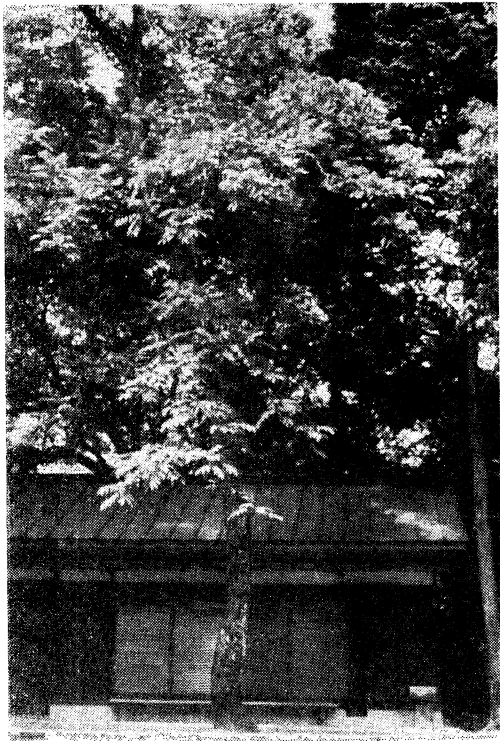


図36 川上神社のヤマハゼ



図37 日野神社のキハダ



図38 西安積八幡神社のスギ